

学校は楽しくなくちや

三原中学校 井上 裕

いじめによる自殺が近年相ついで発生している。最近ではテレビ局に自殺予告の電話が今年になってすでに四件、その度に学校は休んでいる生徒の確認・所在を明確にして、教育委員会に報告している。

幸い第二中学校では、PTA、教職員、地域が一体となり子どもの教育に邁進しているおかげで顕著ないじめは発生していない。しかし、油断は禁物、常に生徒指導委員会を中心に、生徒の日常の行動には目を光らせている。それでも不登校生徒やその傾向にある生徒は、各学年に若干名いて、担任を中心に連日取り組んでいる。

市内でも一、二を争うぐらい落着いた学校でも、不登校生徒いじめ対策には悩まされている。なぜ日本の教育界はこのように変わってきたのだろうか。色々な文献を参考に、私なりに考えてみた。

前は、先生が子どもたちと笑い、ともに学び合う姿がみられたが、いつの頃からか子どもたちと先生が楽しく笑いあっている教室風景をみる機会が少なくなっている。真新しいカバンと制服の一年生は、勉強にクラブに興味津々、楽しみいっぱい校門をくぐる。それがあつたという間に学校嫌いな子どもがいく。一体どうしたのだらう。

学校が嫌いで長期欠席している「不登校生が小中学校合わせて七万七千余人」と、また最高を記録した。

校舎と共に (八)

創作リズム体操

石井哲代

故郷深町に根をおろした教育を子どもと親と教師が丸となって取り組んだと思えます。地域の皆さんにだけ援助して頂き、お世話になったか、子ども達はどれだけくださったか、詩や日記を書いたことか。今思っても胸があつたくなります。

特に夏休み中の大事な時間をさいて子ども達の指導にあたって下さった体育の福島公子さん、版画の乗兼広人さん、三原の平田四郎先生本当にありがとうございました。

あの方、この方を想い乍ら「米づくり」をリズム化して運動会に全校でとりくんだ事を思い出してあります。「創作リズム体操」、「全校リズム体操」とかいろいろ教育界に話題を提供したようです。あの広い運動場で九〇人程の

今までは学校になじまない子を普通でないこと、みなして、学校の枠に押し込めようと腐心してきたが、これからは変えなければいけないのは学校の方ではないか、と発想転換してみた。

地域も学校も家庭も情報量も子どもと学校を取り巻くすべてが大変変わりしている。それなのに、黒板とチョークと教科書に代表される教室のたまたまはまるで変わっていない。教科書の中身は違っても、一斉に教え込むことは明治以来のやり方だ。ここで不登校生の声を聞いてみよう。「自分のしたいことができる時間があるといい」

「自分にとって学校の勉強が生きていくことにそれほど役に立つとは思わない。」次に登校するようになった生徒は「家にいるより学校に行っただ方がおもしろい」。「勉強はわかった時に嬉しい、よかったです。しかし競い合うのは嫌いだ」。さらに「学校におもしろいことや、楽しいことが見つかったから」と答えている。

「先生が子どもとふれあう時間を多く持ってくれたらいいから」。「先生が子どもを理解してくれているから」(以上は文部省が不登校の本人、父母、先生に面接調査結果)。

楽しくなくては学校ではない。そのことを先生たちが認め合うことが第一歩であるが、その先にも楽しいとは限らない。どの

子どもが表現する田起こしも、代かきも牛でした。低学年はのんびりと、畔の草、花や蝶です。苗取りや苗投げ作業、田植え網の田植え、ツバメがすいすい。病害虫予防も手廻しの道具でグルグル。低学年のバツタ達はゆっくり楽しんで飛んでいました。

稲が黄色に実っていました。低学年の雀達は嬉しそうに、紺の着物を案山子のまわりを踊っています。稲刈りで鎌で刈る上級生、低学年の稲は、バターン。バターン。ゆっくり倒れておりました。

それから毎年手直ししつつ、熱演したのですが、田起こし、代かきは耕運機になり、バシャバシャする泥水も速度が速くなり低学年の泥水坊

子にもそれぞれ違った楽しみがあること、その楽しみを子どもと一緒に見つけること。それが先生の役目と肝に銘じて二中の先生は頑張っています。

そこで子どもの願いを実現するために、本校では「選択履修幅の拡大」を昨年度より実施している。これは今までの教室での授業の殻を破り、生徒の期待に応えた画期的な試みなのです。前期(六・七月)に四回(木曜日午後)、後期は十一月十二月に四回やります。ぜひ観にきてやって下さい。

- ▼一年生
 - 「自然の音で音楽を」(音楽)
 - 「ダンス&フリーダンス」(音楽)
 - 「ダンス」(音楽)
 - 「Bassの楽しみ方」(音楽)
 - 「パドミント」(音楽)
 - 「生羽」(音楽)
 - 「七冠王のように将棋に強くなる」(将棋)
 - 「ヒロポロ」(音楽)
 - 「昔遊び研究」(音楽)
 - 「普遊び研究」(音楽)
- ▼二年生
 - 「園児と遊ぼう」(社会)
 - 「お茶に親しもう」(社会)
 - 「郷土三原を再発見しよう」(社会)
 - 「芸術書道に親しもう」(国語)
 - 「ソールリズム・スタディーズ」(日本編)卒業旅行を計画しよう(社会)
 - 「二周辺の植物調査」(理科)
 - 「本に親しもう」(国語)
- ▼三年生
 - 朝早くクラブをする生徒が職員室の開くの待ちかねています。待たせちゃあ可哀想だから。負けじと私も早く登校します。校長先生は三年生の面接にもっと早く来ます。やはり変わるべきは学校の側だと思えます。

やばテンテコ舞い。田植機の出現で、幼苗の低学年はこれ又せわしいことです。病虫害予防もナイヤガラになりました。上級生全員でホースになりグワッ、と、白い粉もグワッ、と襲うので低学年のウンカ達は右往左往。雀脅しも、ガス鉄砲になりました。ドカン、ドカン、あつちでもこつちでも鳴らされるので雀達は身の置場のない程飛び回るのです。稲刈りはバインダーの登場となりました。低学年の稲は忙しい、忙しい。倒されたら直ぐ起き、立っている稲になって上級生のバインダーの前へ行くのですから。

収穫の後はお祭りでした。深町にはお神輿は無いけれど、組体操の人間お神輿を何台もつくってワッショイ!!ワッショイ!!、全校あげてワッショイ!!、お父さんも、おかさんも、おじいさんも、おばあさんもみんなワッショイ!!

席に座っている間もない程充実した運動会でした。

いらっしやいませ

小林裕幸様 千川 七月

九月町内行事予定

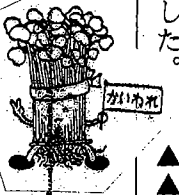
- ▼小学校(幼稚園)
 - ▼始業式 二日
 - ▼水泳記録会 五日
 - ▼(幼)祖父母参観日 七日
 - ▼運動会 二二日
 - ▼(幼)家庭教育学級 二七日
 - ▼尚寿会
 - ▼旅行(三期) 四・五日
 - ▼奉仕活動 二〇日
 - ▼女性会
 - ▼親睦会 上二七日、中・七日
 - ▼下六日
 - ▼敬老会 一六日
 - ▼消防団
 - ▼基礎訓練 八日
 - ▼子ども会
 - ▼廃品回収 一四日
 - ▼三原子ども会ソフト大会 二〇日
 - ▼町内会
 - ▼(中組)旅行 二みるくの里 八日
 - ▼(上組)遊歩道清掃 一日
 - ▼第二中学校
 - ▼運動会 一五日

見に来てネ

大人の猪夫婦と子ども四匹が当地に引越して来ました。場所は上組山中公園への途中で、田圃がなくなるあたりです。日頃は憎まれっ子の猪クンですが、子ども四匹は瓜模様の縞があり、とても愛らしく愛嬌があります。中組の小林さん達が異で捉えた野性のもので、危険ですから柵内に手など入れないように、又、食べ物を与えないようにとのことです。

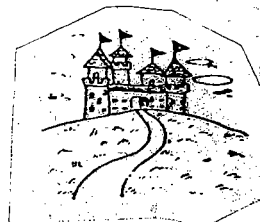
多いか少ないか知らぬが、今迄三回調査される人「時の人」になつたと、云つても「時の人」でなくサンブルである。▼最初は広島市民球場でのカープ戦。若い女性記者がマイクを突き付け何やら質問した。喜びそうな答えをした。らボールペンを一本くれた。

▼二回目は新聞社からの電話調査だった。新聞記者といえは傲慢な口の利き方をすると、との先入感があるが、すぐく訥弁で実直さが伺える人柄だった。確かリクルート事件で、文部官僚のありようが問われていた頃だった。▼最後は昨年六月、総理府から、「行政のあり方」一特に広報活動が主題だった。安藤憲質問書を渡し、丁寧に〇をつけ、調査が終わる雑談しながら、やおら聞いたのが「ご主人の年収」だった。百万以下から二千万以上を百万単位で区切ってあり、千五百万円をボールペンで押した。外交辞礼としても高押し。ずうーと下を示したら安心して〇をつけた。▼全国調査でも三千そこそこのサンプルで大勢は掴めるといふ。問題は調査結果をどう生かすかである。



深の歴史 (十二)

深町と如水館高校
高崎壽郎



土産神千川神社の丘に、学校法人 山中学園如水館高等学校が移ってきた。平成六(一九九四)年九月二四日が落成式。

前身は、永い歴史と伝統の三原工業高等学校と緑ヶ丘女子商業高等学校である。

校舎は近代的で瀟洒な建物で、四季折々に美しく表情を変える自然に囲まれる静かな環境にマッチしたすばらしい学園が誕生した。天からの俯瞰もさぞやと思われる。

「水の如く、なくてはならない人になれ」というのが校是であり、校名もそれに由来している。これに併せて、「誰にも負けない社会性と特技を持った生徒を育てたい。」と、石井文雄校長は情熱を込めて語られる。

この詞は、尾道市出身の著名な大林映画監督作詩の校歌「水のように」であるが、なんと含蓄のあることばだろうか。以前如水館高校が深へ来るらしいときいて、町民の内に心配する声があったことも事実である。「農作物や果物が荒らされたり、風紀が乱れたりしないか」と。それは全くの杞憂であったようだ。

一、水。
てのひらに抄えば、
てのひらになる。
見つめよう、
この心、しなやかに、
きょうを生きてゆく。
きらめいて、きらめいて。
いまここに、水のように。

高校の深町移転の効果として、路線バスが大幅に増便され便

三、水。
風が生まれれば、
風に応える。
語り合おう、
この願い。誇らかに、
約束を結ぶ。
輝いて、輝いて、
いまここに、
水のように。

青空になる。
伝えよう、
この思い、すこやかに、
明日を創り出す。
ときめいて、ときめいて、
いまここに、
水のように。

利になった。
昼間の人口が二千人を超え、
活気ある町になった。
元気のよい若者の顔を見たり、
声が聞けるのは嬉しい。
野球部の活躍など、郷土の自慢話として、如水館高校のこと話が話題にできるようになった。又、如水館高校が我が深町にあることが、広く人々に知られた。

深町が新しい時代を迎えたという予感がする。
などがあげられる。
得筆すべきは、野球部員のマナーのよさであり、最近県道にゴミが少なくなったが、これは如水館のインターアクトクラブの不断の清掃活動のお陰である。昨年の盆行事では、如水館高校生の飛び入り参加があり、会を盛りあげてくれた。今後も町と学園がお互いの行事などを通して交流を深めていきたいと思

深は昔から教育に熱心な土地柄であり、如水館高校を迎えたのを好機として捉え、深を「文教の町」として発展させたい。神奈川県に桐蔭学園という文武に秀でた高等学校があるときく。願わくば将来「東の桐蔭、西の如水館」といわれるようになってほしい。

来春から中高一貫教育を目指し、如水館中学を開校される。先走るようだが、その次は大学

余録

というのは夢であろうか。
尚、昔同じ村であった今の尾道市久山田町には、尾道短期大学があり、共に「学園の町」として進展するの何かの縁だと思ふ。
▲▲

町内会連合会の三大行事の一つ、お盆行事がみなさんの協力を得て盛況裏に終わりました。当日、予想した台風の襲来もなく、暑さも和らぎ絶好のコンディションでした。

千川神社秋の例祭、ヤッサまつり、盆行事と町内各所で奉納している「深町太鼓踊り」。今年十月にお祭り復活を計画している三原本町「あわしまさん」から協賛依頼が来ている由。深町伝統芸能保存のためにも楽しみながら頑張ってください！

